

啄木の「日記」

重松, 泰雄

<https://doi.org/10.15017/2332964>

出版情報 : 文学研究. 39, pp.107-109, 1950-03-31. 九州文学會
バージョン :
権利関係 :



雜 錄

啄 木 の「日記」

重 松 泰 雄

最近、石川啄木の「日記」が三冊になつて上梓された。長らく函館の圖書館にあつて、陽の目を見ることの出来なかつたものである。日記は、いろいろ耳新しい事實を我々に語る。啄木と鷗外との關係などの中にもそれがある。

従来、啄木と鷗外との間の交渉は「スバル」等の關係から、多少の往來があつたらしいことが知られてゐたが（鷗外の日記

——明治四十一年、二年度——にも僅かながら、啄木の名が散見する）この日記を見ると、事務的な間柄を超えて、兩者は、かなり「身近い折衝」を持つてゐたことが察せられる。啄木は、明治四十一年五月二日の初對面以來約一年、鷗外招待の觀潮樓歌會には、殆ど欠かさず出席してゐるし、時には、作品を持參して、添削を乞ふたり（原稿は小説「天寫被」——四十一年六月十一日）私事に關して、通信を交換したりもしてゐる。しかも、啄木の記すところに依れば、鷗外の態度は、終始、彼に對して好意的であつたやうに見える。初對面の日に、鷗外は啄木に、「石川君の詩を最も愛讀した事があつたもんだ。」と語つたと書かれて

ゐるし、又、啄木が、東京朝日に就職して、始めて固定した収入の途を得たことを報じた時、鷗外はその返信（鷗外全集の「書簡」にはない）の中に、「先月の『足跡』（註——「スバル」第二號に發表された啄木の小説）處々の評に不拘好き出来と存候、先日上田敏にも相話候事に候。新聞のシゴトの許り（す）限り著作に御努力所祈に御座候」と忠告を與へてゐる。たしかに、かういふ事實には、身近かな折衝と呼ばれてもいい、鷗外と啄木との關係が耳新しく示されてゐる。それは、あまり簡潔に過ぎる、既發表の、鷗外の「日記」などからは窺ふことの出来ないものであつた。しかし、問題となることは、この實際的な方面について示された事實が、兩者の精神的な交はりの解明に對して、どれだけ、「耳新しい」影響を與へ得るかといふ点である。

日記の中に、啄木が、鷗外を評して、かう云つてゐるところがある。「この先生（註——鷗外）は、文學を見るに、全く箇々の作品として見るので、それと思想との關係を見ないといふことを感じた」（明治四十二年一月十六日の項）この極めて單純な言葉は鷗外に對して、決して適切な評言であると考へられないにも拘らず、或意味に於て、極めて簡明に、鷗外と啄木との思想的な觀点の相違を物語つてゐると言ふことが出来る。例へば、兩者の對自然主義觀を取り上げて、この言葉を検討してみよう。鷗外の自然主義觀は、彼の基本的な世界觀と結び付いて居り、つねにそれ自体直接に述べられてゐない。従つて、我々は、それを、彼の作品の内部から、間接に聴かなければならない。『青年』の

大村は、「日本の新人といふ人達」を指して『小さいのですとも。あれは clique の名なのです』と恬然として云ふ。聊か、この斷定は性急であるかも知れないが、ここで「日本の新人」を、自然主義に、大村を、鷗外に置き換へて考へることが必ずしも不當であるとは思はれない。しかし、『青年』の新人論は更に發展する。新人には、「消極的の新人」と「積極的の新人」とが存在する。『消極的の新人と積極的の新人と、どつちが本當の新人かと云ふことになりましたね』『ええ。まあ、さうです。その積極的の新人といふものがあるでせうか』（中略）『さうですねえ。有るか無いか知らないが、有る筈には相違ないでせう。破壊してしまへば、又建設する。石を崩しては、又積むのでせうよ……』（全集四）ところが『新人も積極的になつて、何物かを建設したら、又その何物かに捕はれるのではないか』それならば、消極的に「懷疑」乃至「永遠の希求」に位置する他はないかといふ主人公一の問ひに對して、鷗外は、後に、大村をして、新人にとつて「道德」は意識して縛られるいまいしめであり『自己が造つた個人的道德が公共的になるのを、飛躍だの、復活だのと云ふのだね。だから積極的の新人が出来れば、社會問題も内部から解決せられるわけでせう。』と云はしめてゐる。即ち、鷗外に依れば、自然主義を標榜する新人達は、破壊のための破壊者であり、無目的な「外から手を出して滅すには及ばない」（森鷗外氏の文藝未來觀——全集一九）文藝的小徒黨であつたと思はれる。そして、注意すべきことは、鷗外がかう自然主義を斷定することが、彼自身の基本的な世界觀と密接に結びついて居り、その自然主義觀は、

前述のやうに、新人觀——廣く進歩と保守觀を通じて、彼の思想の一部分を形成して居るといふことである。しかも、鷗外の自我は最も低いところに居る。云ひかへれば、鷗外が自然主義をかう斷定する背後には、すべての思想的思想を示揚した超思想家が存在するのではなくて、寧ろ、當時の日本のナチュラリストが持つてゐた自然主義が、生きた社會的基盤の上に根ざした、完全必須の思想体系ではなく、外來思想の觀念的な移植にしか過ぎないといふ点を觀破してゐる人間が居り、ひいては、すべての思想が、この社會では無用である、とする低俗なベシミストが居る。そして、その低俗さが政治的に働けば、中野重治の云ふ「日本の古い支配勢力のための一番高いイデオログ」（鷗外位置づけのための雜文）と化し、文學的にうごけば、意外にネガティブな社會性に富む作品を物することになる。啄木が「鷗外は、作品と思想との關係を見ない。」といふ言葉で表示したものは、彼が「盛じた」鷗外のかういふ一面であつたと思ふ。そして、啄木自身は、同様に、自然主義思想の觀念性を洞察しながら鷗外とは逆に、思想の人格的鍛練によつて、思想に息吹きを與へ、思想と實生活との間の斷層を埋めることが出来るとした。新しい建設的な思想を、建設的に提示することに依つて、社會の改造が可能であると信じた。従つて、この語は「思想」を廻る、啄木と鷗外との思想的對立乃至へだたりを、極めて端的に表明する。

そして、此の言葉も亦、啄木、鷗外間の折衝を示す耳新しい事實であり、特にそれが精神的な領域に屬する以上、啄木の「日記」が語つてゐる鷗外との「身近かな折衝」（卷二卷末解説）

も、自ら限界のあるものであり、さらに、そこに限界を附せざるを得ないとすれば、事實の耳新しさも亦、自らその價值を割引きされねばなるまい。

尙、最後に「限界ある折衝」に就いて、もう一言すれば、鷗外の日記には、全く啄木の死が現はれない。二人の交誼が、如何に短期間のものであつたにしても、一言半句も啄木の死に對する記載がないのは、聊か不當に過ぎるやうな氣がする。また、數年の間に鷗外が死亡通知も受取らぬ程、二人の間柄が疎隔になつてゐたとも考へられない。現に、死亡後約一ヶ月半の六月四日には、鷗外が、房州に轉地してゐた啄木の夫人節子に「返信」を認めた事實が見える。(日記——全集二二) それにも拘らず、一言も啄木の死去に觸れてゐないのは、奇妙であるといふ點を超えて聊か不自然である。一時あれほど親交のあつた、太田正雄との間と同様に、矢張り啄木の思想的轉向などにその原因があつたのであらうか。それとも、これも亦、厄介な鷗外のレジグナチオンのせゐであらうか。